

「自己表現という翼を持った人たち」

20 年前、片山工房が設立した時、障害のある方々が、今のように自己表現する環境は日本には無かった。

彼らは特別支援学校を 18 歳で卒業した後、地方自治体が運営する作業所と呼ばれる場所に通うことが多かった。障害を持つ子どもの親も、自分の子供が社会の一員として働いてほしいと考えていた。作業所は、障害を持つ方が就労し日中を過ごせる場として確立されていた。片山工房の前身は、この作業所であり、作業を行う場として立ち上がった。

しかし、作業する場所というものの、実際には、障害者のできる事ややりたい事と全く合っていない単一の作業が割り当てられた。障害のため、そのような作業が身体的に難しい人々は、作業所に来て一日中ただじっとして時間が過ぎるのを待つしか出来ない。職員がその分の作業を代行するというのが作業所のかたちだった。

僕は、そういった作業所のあり方に疑問を持った。そして最初の変革として、障害者の方たちに、彼らができない仕事を割り当てることをやめた。一切の作業をストップした。そして、彼らと向き合ってじっくり話し合った。すると、「自分はこんなことがしたい」「自分の名前を書きたい」「本当は絵を描いてみたい」と今まで静かだった人々の声が聞こえてきた。

澤田隆司は重度の脳性麻痺で右足だけ動かすことができた。最初、足で字を書いてみようとしたが書けなかった。試行錯誤したのち、動かせる右足で紙コップに入った絵の具を蹴って流したら、絵ができた。その姿を見て、僕は自然と彼に「明日は何をしましょう」と言っていた。その瞬間、みんなの未来が見えた。

それからは、その人がその人らしく生ききる手法として、アート活動を支援することにした。できない仕事をさせるのではなく、出来ることの連続が明日への活力になると考えたからだ。僕は人が「生きている」ことを感じる場を作りたいと思った。働く事イコール生きる事ではない。かくして、作業所の名称を「片山工房」と改め自己表現の場の提供を始めた。

この生き活きとした自由な表現作品を社会に提示することが、観る人の「生きる力」に繋がればいいと望む。

片山工房は『人が軸』という哲学のもと、人に寄り添うことをベースに今も活動している。

特定非営利活動法人 100 年福社会
理事長 新川 修平

沿革

1993 年 4 月	自立生活センター（小規模作業所）として開始
2003 年 6 月	名称を「片山工房」に変更、障害のある方のアート支援として開始
2004 年 4 月	カタヤマ・アートクラブ 障害アート支援、制度外の方を対象に始動
2010 年 6 月	特定非営利活動法人 100 年福祉会設立
2011 年 10 月	障害福祉サービス事業 片山工房（生活介護事業）を開始
2013 年 6 月	10 周年を迎える
2013 年 12 月	10 周年記念シンポジウムを開催
2023 年 6 月	20 周年を迎える